

教育目標

【自分づくり】社会に目を開き 「なりたい自分」の姿を描き 実現しようとする人

- 自ら考え、表現できる人（創造）
- 仲間とともに高め合える人（共生）
- 心身ともにたくましい人（健康）

学校だより 第19号

ひらく

平成28年10月 7日発行
須賀川市立第三中学校
TEL 73-2377
発行責任者：校長 高崎則行

吹奏楽部、「成長の証」金賞 県大会進出ならず“涙”

地区中体連新人総合体育大会に引き続き、9月29日（木）には、須賀川市文化センターで岩瀬地区音楽祭（第2部）・合奏祭が開催されました。本校吹奏楽部は、金賞を獲得するも、あと一步のところで県大会の出場権を獲得することはできませんでした。

実は、私も小学4年生から6年生まで器楽部に入って活動していました。夏休みは学校に合宿し、正月の3日間しか休みがないというような厳しい練習に明け暮れました。食卓に手をのせると、勝手に指が動いてしまい、何度も父親に叱（しか）られました。4年生の終わりごろ、県大会であったか、東北大会であったか、コンクールで他校の演奏を聴（き）いて背筋（せすじ）がゾクゾクッとするという経験をしました。それからは良い演奏を聴くと背筋がゾクゾクッとするんだなと思っていました。あれから歳月が過ぎ、大人になってからは、そんな経験から遠ざかっていました。



【この写真は福島民友新聞社からご提供いただきました】

この日は、3度、目がウルウルとなりました。この時が2度目のウルウルです。しかし、客席の右最前列にいた生徒たちが、他の金賞受賞校のように歓声を上げたという記憶が私にはありません。歓声をあげなかったのかもしれませんが。

続いて、県大会出場校が2校発表されました。残念ながら本校は選に漏（も）れてしまいました。ステージ上で表彰を受ける高木ほのか（部長）さんの表情がさえません。「県大会出場がかなわなかったのは残念だけど、立派な成績だったのだから胸を張って学校に帰ろう。」という言葉を用意して、閉会式が終わった後、生徒たちのもとに行きました。全員が表情に悔しさをにじませ、多くの生徒がはらはらと涙をこぼしています。この3度目は、ウルウルではすまなかったかもしれませんが。顧問の鈴木教諭にかけた言葉も、生徒にかけた言葉も震えていました。「胸を張って学校に帰ろう」という言葉は飲み込んでしまいました。

吹奏楽部の生徒は、目標をしっかりと持って、上級生も下級生もなく励まし合って練習に邁進（まいしん）してきました。あと一步というところまで来て届かなかったという悔しさは貴重な経験になると思います。3年生は、10月26日（水）の校内文化祭「華王祭」のステージを最後に引退となります。その日の演奏が、3年生にとって最高の演奏となるよう期待しています。

この日は、3度、目がウルウルとなりました。

本校の演奏が中盤にさしかかり、背筋がゾクゾクッとしました。「本校の演奏もここまで来たか。子ども音楽コンクールの後も本当に真剣に練習してきたんだな。」と思ったのは、その後でした。そして、自分の内面と対話し、この子たちが奏（めい）でる演奏が目頭を熱くさせているのだと確認しました。

閉会式の成績発表で、「須賀川市立第三中学校、ゴールド・金賞」とアナウンスされました。「子どもたちの努力と成長が認めら



各種表彰の記録

第29回夏季中学生ソフトテニス選手権大会

共通女子の部 第1位

伊丹美杜(みもり)②・小野塚聖美(さとみ)①組

1年生女子の部 第1位

斎藤 未来(みく)①・加藤 碯彩(きいろ)①組

第31回全日本 Jr. クラシック音楽コンクール

木管楽器部門中学生の部 本選合格証

村越 愛希(あき)③

平成28年度地域安全ポスターコンクール

優秀賞 久木田ルナ③

(注) ○に数字は学年。下の記事も同じ。

幼稚園の運動会をお手伝い

10月1日(木)、和田幼稚園の運動会が行われました。中間テストの3日前から部活動の停止期間でしたが、本校生徒がボランティアでお手伝いに参加して、園児の楽しい思い出を演出しました。

参加したのは、有我拓磨(たくま)①、関根 蓮(れん)②、佐久間蓮(れん)②、菅原勇人(ゆうと)③くんの4名で審判係と準備係を担当し、幼稚園の先生、保護者の皆さんとともに運動会の運営をしっかりと支えてくれました。

最終下校時刻は午後6時30分

中体連新人総合体育大会以後、最終下校時刻は午後6時30分です。

学校でも生徒が被害に遭(あ)わないように、下校時には繰り返し注意を喚起(かんき)してまいります。ご家庭でもお子さんの帰宅時間の確認と指導をよろしくお願いいたします。

なお、部活動などの放課後活動がない場合の下校時刻は16時10分、部活動の最終終了時刻は原則として次のとおりです。

4月～新人大大会まで	午後7時
新人大大会～11月まで	午後6時30分
12月～2月まで	午後6時
3月	午後6時30分



その6 性教育(家庭教育文献紹介「親でなければできない教育」より)

「性」の根本にあるものは生命の誕生であり、人間生活の根底にはさまざまな男性と女性の関わり合いがあります。広い意味での性教育が、人間理解の教育につながっているのです。しかし、かつて性教育を受けてこなかった世代が、子どもにそれを行うのはきわめて難しいことです。(昭和50年代以降、性教育の重要性が高まってからも、学校間格差(かくさ)や教師間格差が大きかったため、今でもすべての家庭に共通の課題であると言っていいでしょう。)

長期間にわたって、様々な機会に、いろいろな角度から柔軟な考え方や態度を養うことができるのが家庭における性教育の特長です。子どもは、親である夫婦の生活を通して男性と女性とが愛情と協力に支えられている姿を家庭から学びます。性が、子どもに好ましい印象を与えるか否かは家庭に負うところが大きく、現代のように生命の誕生が容易にコントロールできる時代には、家庭のムードや話題などから生命の神秘や生まれた子どもの尊厳(そんげん)を学ぶことが、性教育の出発点では非常に重要です。

また、性に関するたくさんの情報が子どもたちを取り巻いています。わが子が必要な情報を正しく理解しているとは限りませんし、情報に振り回されている場合もあります。ですから、子どもに今必要な情報は何かを選んでやるのも親の役割です。親は、自分が受けなかった教育も、我が子のために学習し直してみる意欲を起さなければなりません。その際、重要なのは生理面よりも心理面です。男の子が女の子に抱(いだ)いている心理、女の子が男の子に抱いている心理を性的特徴とともに伝えたり、異性に対する意識の発達とそれに伴う葛藤(かつとう)などに正しく向き合うことができるようアドバイスをしたり、年齢にあった書籍(文芸書も含めて)を与えたりするのもよいでしょう。子どもの発達に合わせて長い間にわたり根気強く指導を積み重ねていくことが、青年を性の危機から救ったり、健康な性の考え方や態度を形成する力になったりしているのです。

